

平成二十九年年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・開会の辞

著者	大山 喬史
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	23
ページ	3-4
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1646/00000302/



開会の辞

鶴見大学仏教文化研究所所長 大山 喬史

皆さん、こんにちは。本日は、鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウムにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。仏教文化研究所がスタートして、早二十年を越えましたが、これも関係者の皆様のあたたかいご支援のおかげと心より感謝を申し上げます。

本日のテーマ「仏教に学ぶ保育の原点」におきましては、昨今の目に余る悲惨な出来事を目にし、或は聞くにつけ、幼児期における感性教育の大切さを改めて感じる場所があります。天性として誰もが授かった、汚れない命をどのように育んでいけば良いのでしょうか。「子曰く、性、相い近きにあり、習い、遠きにあり」とございます。人の生まれつきは、みな同じようなものです。日頃の姿勢・習慣、そして、どれほど学問を身につけるべく努力してきたのかによって大きな隔たりが生じ、人によっては別人になってしまう、とのこと。ましてや、新生児の脳は、大人の脳が一三〇〇グラム、子ども（新生児）の脳は、その三分の一、わずかに四〇〇グラム、六ヶ月後には八〇〇グラムになり、十歳になると、大人とほとんど同じまでに成長します。これを思いますと、幼児期から十歳までの成長期における教育がいかに大切か、この間の感性教育・子供の教育の重要性が理解できるかと思えます。

話が少しそれますが、美味しいものを美味しいと認知・学習し、生涯に亘り記憶されるのも、この時期なんです。親御さんはもちろん、周りの方々からの愛をいっぱい受け、その喜びとその優しさが、そのお子さん自身の感性を呼び起こすのも、この時期なのです。今日の、佐藤先生、山崎先生、山室先生、橋本先生、そして、仙田先生の、い

ずれのテーマも私としては、大変楽しみにしておりますし、実りのあるものと期待しております。

簡単ではありますが、これを以て開会の辞とさせていただきます。今日一日、長時間にわたりますが、よろしくお
願い致します。どうもありがとうございました。